洋１３－８

「一瞬の夢（小武／Ｘｉａｏ　Ｗｕ）」　✿✿✿✿

２０１３（平成２５）年1月１３日鑑賞<シネ・ヌーヴォ>

監督・脚本：賈樟柯（ジャ・ジャンクー）
小武（シャオウー）／王宏伟（ワン・ホンウェイ）
梅梅（メイメイ）（カラオケバーのホステス）／左百韬（ズオ・バイタオ）
小勇（ヨン）（シャオウーのかつてのスリ仲間）／郝鸿建（ハオ・ホンジャン）
小武の父親／馬金瑞（マー・ジンレイ）
１９９７年・中国、香港映画・１０８分
配給／ビターズ・エンド

<やっと今、賈樟柯監督のデビュー作を！>

賈樟柯（ジャ・ジャンクー）監督の作品については、２００４年6月１９日から7月３１日までシネ・ヌーヴォで開催された「中国映画の全貌２００４」でその第３作『青の稲妻』（０２年）をはじめて鑑賞した。『青の稲妻』は改革開放政策がドンドン進み、若者の感覚も激変していく２００１年の山西省の地方都市、大同（ダートン）を舞台として、揺れ動く１９歳の男女を主人公に描いた話題作。そして、中国にもこんな映画があるのかとビックリする映画で、「無気力」と「タバコ」が印象的な映画だった（『シネマルーム５』３４３頁参照）。

本作は、中国第６世代監督の旗手としてその後、『プラットホーム』（００年）、『青の稲妻』、『世界』（０４年）（『シネマルーム１７』２８９頁）、『長江哀歌』（０６年）（『シネマルーム１７』２８３頁）、『四川のうた』（０８年）（『シネマルーム２２』２１３頁）等を監督した賈樟柯監督の１９９７年のデビュー作だが、シネ・ヌーヴォの「中国映画の全貌２０１２－３」の企画で『プラットホーム』と共に上映されるため、「こりゃ必見！」と思って鑑賞することに。

<原題は？主人公は？時代は？舞台は？>

本作の原題はスリを稼業としているチンピラの名前『小武』だが、邦題は『一瞬の夢』。そして本作は『青の稲妻』と同じように、賈樟柯監督の出身地である山西省の地方都市、汾陽（フェンヤン）を舞台として、開発と都市化が進む時代の流れに取り残されていく主人公・小武（シャオウー）（王宏伟／ワン・ホンウェイ）の姿を描いた映画で、その時代は１９９７年。「厳打」と呼ばれる犯罪追放キャンペーンが進む汾陽のまちでは、かつてのスリ仲間だった小勇（ヨン）（郝鸿建／ハオ・ホンジャン）は立派に更生し、実業家として成功していたが、小武は今もスリで日銭を稼ぐしか能がないらしい。そんな小武の姿を見ていると、『青の稲妻』で見た無気力な若者たちとはまた異質のやりきれなさと無力感でいっぱいになるから、『一瞬の夢』という邦題はいかにもピッタリだ。

本作は１９９８年のベルリン国際映画祭で最優秀新人監督賞、最優秀アジア映画賞等を受賞し、賈樟柯監督の名を一躍世界に知らしめた映画で、そのテーマは当時としてはたしかに新鮮だったのだろう。しかし、２０１３年の今本作を観ると、少し陳腐な感も・・・。また、小武がタバコに火をつけるアップのシーンから始まる本作も『青の稲妻』と同じく全編を通してセリフは少ないが、タバコに火をつけるシーンと黙ってタバコを吸うシーンがやたら多い。これも最初は新鮮だったが、似たようなシーンばかり見ていると少し飽きてくる感も・・・。

<イライラその１　元親友との関係は？>

中国では日本以上に人脈が大切だし、人間関係では面子が重んじられるから、警察官にまで届いているという小勇の結婚式の案内状が自分に届いていないことに、小武は今大きなショックを受けていた。結婚式に参列しないまでも、お祝いだけは届けなければスリとして共に若い日々を生きてきた俺の名がすたる。そう思った小武は人の懐から盗んだ財布の金を赤い紙に包んで小勇の家を訪ねたが、そんな小武の気持を見透かしたかのように小勇はそんな小武を完全に拒否。

そりゃ、そうだろう。小武はなぜいつまでもそんなつまらない面子にこだわるの？また、犯罪追放キャンペーンの波に乗って（？）、業を探す努力をしないの？改革開放政策の波によって汾陽のような田舎町にも押し寄せてきた大きな「変化」には容易に対応できないとしても、いつまでもスリ稼業で生計を立てることなどできないことは明らかだ。変化する時代の中でしっかり自分を見つめ直すこともせず、タバコばかり吸いながら親友小勇の結婚式に右往左往する小武の姿に、まず私はイライラ・・・。

<イライラその２　梅梅との男女関係は？>

本作は恋愛劇ではないが、中盤からはカラオケバーで働く女性・梅梅（メイメイ）（左百韬／ズオ・バイタオ）と小武との奇妙な男女関係（？）が大きなテーマとして浮上してくる。せっかくカラオケバーに来たのに、自分は全く歌おうとせず、梅梅にばかり歌わせている小武を見て、梅梅が少し不機嫌になったのは仕方がない。誰だってこんなうっとうしい客はイヤなはずだ。ところが、小武はその後も再三梅梅を指名して店にやってくる他、ママに金をはずんで店外デート（？）にまで連れ出したから、こりゃ何かの魂胆が・・・？そんな疑いを持ちつつ、梅梅は仕事だと割り切って小武に付き合ったが、どこに行きたい、何を食べたいとも言わない小武に梅梅が大いに戸惑ったのは当然。こんなうっとうしい男と一体どう付き合えばいいの？

賈樟柯監督は、そんな２人の奇妙な男女関係を長回しのカメラで執拗に撮っていくが、これが続くと観ている方も少しうっとうしくなってくる。それでも、腹痛のため店を休んでいる梅梅を家まで見舞いに来てくれたり、腹痛を治すための湯たんぽをいそいそと買ってきてくれたり、小武は何かと優しくしてくれるのだが、この男の本業は一体ナニ？そんなこんなを考えると、梅梅の気持が少しは小武に傾いたとしても、小武を完全に受け入れることができないのは当然。しかして、ある日ついに梅梅は下宿を引き払い、小武の前から姿を消してしまうことに。

今どきの日本の草食系男子の男女関係を見ても私はきっとイライラするだろうが、こんな小武と梅梅の中途半端な男女関係にもついイライラ・・・。

<イライラその３　実家での小武は？>

梅梅との結婚まで考えた小武が１８金の指輪を買ったのは立派だが、何しろそこに至るまでの合理的・理性的な２人の話し合いが欠如しているから、折悪しくその頃梅梅は金持ちの男との縁談の話に乗っかり、小武の前からドロン。失意の小武は仕方なく両親の住む実家に戻ったが、そこでも何の仕事をするわけでもないから、これには年老いた両親もイライラ。

ここで小武は梅梅のために買った指輪を母親にプレゼントしたが、それは自分で持っていても仕方ないというきわめて消極的な動機によるものだ。ところが母親は、その指輪を今度結婚することになった次男の嫁用に使うことにしたから、それに怒ったのが小武。母親にしてみれば、自分がもらったものだから、その「有効活用」をしただけで一体何が悪いの？そう反論していると、いつの間にか父親（馬金瑞／マー・ジンレイ）も巻き込んだ親子ゲンカになってしまったため、小武は結局実家からも追い出されることに。しかし、なぜこんなにすべてが悪い方、悪い方、に展開していくの？実家に戻った小武の姿を見ていると、私のイライラはピークに・・・。

<地方局は、なぜこんなことまで放映するの？>

１９９７年の中国の地方都市に普及しているテレビはかなりボロだが、ビックリしたのは地方局の取材が地域密着型でかなり充実していること。小勇の結婚式が大々的に取材されているのは、今や小勇は「地方の名士」になったからだ。

小武が実家から追い出された後訪れる本作ラストの展開は何とも意外なもので、再びまちに戻り、スリ行為を働いた小武がついに逮捕されるシークエンスで終わる。なじみの警察官の前につき出された小武は所定の手続を経て起訴されるのだろう。そう思っていると、１９９７年の中国の地方都市における窃盗犯の処理の仕方は意外だ。いくら小武が被疑者の立場であっても、警察官が所用でちょっと離れる間、道端の電柱の支柱に被疑者を手錠でつないでおくというのはいかがなもの。たちまち周辺は好奇の目で小武を見る人たちでいっぱいになったから、この光景にはビックリ。さらに、テレビの地方局がいかなる取材をしたのか、テレビの画面にはスリの現行犯として逮捕された小武の顔がデカデカと映し出されて、まちの人々のさらしものにされているから、これにもビックリ。

中国では今、有力週刊紙『南方週末』の新年社説を中国共産党が勝手に書き換えた事件が大きな波紋を呼んでいるが、個人の人権を軽視する風潮は昔も今も全く同じ・・・？

２０１３（平成２５）年1月１７日記